琉球大学学術リポジトリ

子どもの小学校入学を控える保護者を対象とした家庭教育講座の実施方法の考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2012-11-06 キーワード (Ja): 家庭教育, 社会教育行政, 子育て支援, 学社連携, 学社融合 キーワード (En): 作成者: 神田, 雅貴, Kanda, Masaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25275

琉球大学生涯学習教育研究センター　研究紀要　No. 6　pp. 29～38, 2012

研究論文

子どもの小学校入学を控える保護者を対象とした家庭教育講座の実施方法の考察

A Consideration of the Implementation Methods of Parenting Courses Especially for Guardians Having a Child Who Will Attend Elementary School Next Year

神　田　雅　貴*

【要　旨】

（目的）子どもの小学校入学を控える保護者を対象とした家庭教育講座の実践を、参加者のアンケートなどから、その成果と課題を明らかにし、今後の講座開催方法を考察する。
（調査方法）６校で実施された「親の学習」の参加者にアンケートを実施し、156人から回答を得た。さらに、筆者及び生涯学習課職員が講座に立ち会い、参与観察を行った。
（調査結果と考察）アンケートの結果から、学習目標である「小学校入学半年前という時期をふまえ、保護者が行うべきしつけや関わりについて学ぶこと」については、効果が認められた。さらに、約半数の参加者が小学校入学後の心配や不安を感じており、具体的には、子ども同士、もしくは保護者同士の人間関係であった。そのことをふまえ、人間関係構築を支援できるような講座形態・内容を実施する必要性が示唆された。

キーワード：家庭教育、社会教育行政、子育て支援、学社連携、学社融合

Ⅰ．はじめに

川島町教育委員会生涯学習課では、家庭教育を学ぶ学習機会として「親の学習」を平成20年度より開講し、平成23年度で４年目を迎えた。平成22年度より、筆者が担当を務め、参加者へのアンケート調査、学校のニーズ、本町の生涯学習推進総合計画をふまえ、講座の運営方針の検討をすすめてきた。

本稿では，前年度の結果をもとに実践した、平成23年度の「親の学習」における成果と課題を明らかにし、今後の講座開催方法を考察するものである。

さて、家庭教育は親が子どもに対して行う教育(1)で、すべての教育の出発点である。しかし、日高（1973）は、明治以降、学校制度の発足による教育の機能分化により、家庭教育の機能が学校教育に移譲される傾向が強くなったことや、戦前の家庭教育のよりどころであった「家制度」が戦後に廃止され、親の教育者としての形式的な権威も失墜したことで、家庭教育は混迷と不在の様相を濃くしていった(2)と述べている。また、山本（1988）は家庭の父親不在が子どもの社会化に影響を及ぼし、そのことを補うために母親の学校に対する依存心が強くなること(3)を指摘している。さらに、今日

*川島町教育委員会生涯学習課社会教育主事

の核家族化により、遠藤（2011）は「祖父母などから父母への育児の知識などの伝達や祖父母の子育て参加などは少なくなっている」[4]と述べている。このような状況に対して、中央教育審議会などの答申・報告で、家庭の教育力の低下を指摘して、この教育力を高めていくための学習機会が重要であると述べている。[5]~[6]

国立女性教育会館が行った調査[7]によると、「親になる前に子どもの世話の仕方の学習をしたか」について、1994年の調査と比較すると、「育児の本を読んだ（１位)」が39%→30%（９%減)、「親から教えてもらった（２位)」が37%→29%（８%減)、「親戚や知人の子どもの世話をした（３位)」が34%→29%（５%減）と回答順位は変わらないが、学習経験が減少していることが明らかになった。

これまで述べた状況をふまえると、家庭教育は日常生活の中で自然に行われるだけでは不十分であり、意図的に学ぶ機会を作り出していく必要があると考えられる。つまり、家庭教育に関する社会的な支援が求められており[8]、社会教育行政においても、家庭教育への取り組みが求められているのである。

Ⅱ.「親の学習」プログラムの策定と川島町における位置づけ

「親の学習」は、平成18年度に埼玉県が作成した中高生と保護者を対象とした家庭教育のプログラムである。このプログラムは、指導者をファシリテーターと位置付け、【表１】のとおりワークショップを中心とした参加型の学習で構成されている。親の学習の目的は、『多くの方々の意見を聞きながら、自分の家庭で「何か活かせるヒント」がないかをお互いに探すことにあります』[9]とされ、参加者が話し合いを通して、学びあうことを重視している。

また、川島町は生涯学習推進総合計画において、家庭教育の充実を６つの基本目標の１つとし、重点施策として位置付けている。近年の家庭教育への取り組みとしては、平成19年度までは年間１回の家庭教育セミナーを町内の全域を対象に実施してきたが、平成20年度には家庭教育セミナーに代わる事業として、６小学校区でＰＴＡ役員を対象に「親の学習」を実施した。平成21年度からは各小学校の就学児健康診断の待ち時間等を利用し、「親の学習」を実施している。

表１　「親の学習」の展開例

時　間	活　動	留　　意　　点
10分～20分	アイスブレーク・グループ分け	・参加者の緊張を解き、参加しやすい和やかな雰囲気づくりを行います。簡単なゲームやワークなどの手法を用いることがあります。 ・話しやすい小グループに分かれます。
30分～60分	ワーク・学習の目標を確認し合います。	・エピソードや資料・データなどをもとに、個人やグループ、全員でワークを行います。 ・話し合い、ロールプレイ、模擬体験など様々な方法を使います。 ・必要に応じて、ファシリテーター（学習支援者）は、簡単な講話、説明などを行います。
10分～20分	ふりかえり	・参加者が気づきや感想をまとめたり、他の参加者の意見を聞いたりして、学習内容を深め広げます。

『「親の学習」プログラム集』ｐ３より

Ⅲ. 前年度（平成22年度）の「親の学習」の実践内容

平成22年度は、次年度に子どもが小学校に入学する保護者を対象に、小学校の就学児健康診断の待ち時間を利用して行われた。当初、すべての学校が話し合いを中心にしたワークショップ型で実施する予定だったが、ある講師から「開催時間を考慮すると講話を中心とした講義（聴講）型のほうが適

している」と提案があった。そこで、ワークショップ型と聴講型の異なる形態で実施し、どちらの形態が効果的か比較することにした。講座内容は、小学校管理職、講師の意見、生涯学習課の方針をふまえて決定した。

ワークショップ型は４校で実施され、子育ての人的・物的な資源について、話し合いを通じて学ぶ内容とした。学習教材には「親の学習」プログラムを活用するか、「親の学習」を参考とした資料を独自に作成した。

聴講型は１校で実施され、子どもの発達段階の理論を学び、家庭でどのような関わりを具体的にするべきかを学ぶ内容とした。そのため、学習内容は埼玉県が作成したプログラムと異なるが、便宜上、「親の学習」として実施した。

Ⅳ．前年度の評価と平成23年度に向けた３つの方針案

５校の実践内容の評価は、参加者のアンケート結果と、講座の参与観察結果を中心に行った。その結果をもとに、「学習内容の選定が適切であったか」、「講座形態は適切であったか」という視点で分析を行った。ここでは、紙面の都合で詳細な調査結果・考察は省略するが、主に以下の点が調査結果から考察された。

① 参加者が「親の学習」に対して期待していることは、１位「親としての子どもへの接し方」(11.9%)、２位「同年代の保護者との情報交換」(11.4%) であった。

② 小学校の「親の学習」に対する要望は、「参加者同士の人間関係を構築する機会にしてほしい」、「子どもの発達段階を改めて学ぶ機会にしてほしい」の２通りであった。

③ 学習時間が45～60分に制約されているので、効率的に知識を学ぶという意味では、聴講型のほうが向いている。(ただし、ワークショップ型を否定するものではない。)

④ 参加者の意向、小学校の意向、生涯学習課の方針、開催時期、講演時間などの諸条件に応じて、講座を企画したほうが良い。

この考察をもとに、以下の「平成23年度の３つの方針案」を決定した。

(1) 小学校入学半年前という時期をふまえ、保護者が行うべきしつけや関わりについて学ぶ内容とする。

(2) 学習時間が60分以内と短いことを考慮し、基本的に聴講形式とする。ただし、小学校が人間関係を作る機会として希望するのであれば、ワークショップ形式に変更することや、講座の中で自己紹介や意見交換の時間を設けることとする。

(3) 学校と情報を共有し、連携を深めながら実施するために、学校に訪問しニーズの把握を行い、事業内容に反映させる。

Ⅴ．平成23年度の講座内容の決定過程

講座内容の決定に関しては、５月の園長校長会において、開催意向のアンケート調査を行った。質問内容は、開催希望回数、開催日時、対象者、開催内容、講師の希望についてである。その結果をもとに、８～９月に筆者と生涯学習課職員で各小学校を訪問し、「平成23年度に向けた３つの方針案（以下、「３つの方針案」と表記)」をふまえて、校長もしくは教頭と調整を行った。

具体的には、「３つの方針案」の(1)に基づき、小学校入学半年前という時期をふまえ、保護者が行うべきしつけや関わりについて学ぶ内容を提案し、各学校から了解を得た。

講座形態については、「３つの方針案」の(2)に基づき、開催校の意向をふまえ決定した。その結果は、３校が聴講型、２校が聴講＋ワークショップ型（講話と話し合いの割合が同じくらいの学習形態)、１校がワークショップ型となった。各小学校の講師、講座タイトル、学習形式、講義時間、内容等は、

以下の【表２】のとおりである。なお、入学予定校以外で受講している保護者が若干いるので、参加者が入学予定者よりも多い学校がある。

表２　平成23年度「親の学習」の実績

学校名／講師	講座タイトル／学習形式／講義時間／内容	参加者
Ａ小学校 Ｚ講師 大学教員	「健やかな子どもの成長を目指す親の知恵」聴講型（60分） 子どもの発達段階の理論を学び、小学校入学までに、家庭でどのような関わりをするべきか学ぶ。	55名 入学予定者58名
Ｂ小学校	※講師・内容はＡ小学校と同じ。	47名 入学予定者46名
Ｃ小学校 Ｗ講師 家庭教育アドバイザー	「今、新しい生活を見直して　～入学前の保護者の学びあい、子の育ちあい～」　聴講＋ワークショップ型（60分） 埼玉県が作成した『子育ての目安「３つのめばえ」』と「親の学習」プログラムを利用し、子どもの発達段階を学び、小学校入学までに、家庭でどのような関わりを具体的にするべきか学ぶ。	13名 入学予定者11名
Ｄ小学校 Ｗ講師 家庭教育アドバイザー	「今、新しい生活を見直して　～入学前の保護者の学びあい、子の育ちあい～」　聴講＋ワークショップ型（60分） 埼玉県が作成した『子育ての目安「３つのめばえ」』と「親の学習」プログラムを利用し、家族が言葉で伝えあう大切さを学ぶ。また、話し合いを通じて、保護者同士の人間関係を構築する。	19名 入学予定者19名
Ｅ小学校 Ｙ講師 家庭教育アドバイザー	「子どもが元気になる生活リズムとは」　ワークショップ型（60分） 「親の学習」プログラムを利用し、小学校入学までに基本的生活習慣を整えることの大切さを学ぶ。また、話し合いを通じて、保護者同士の人間関係を構築する。	18名 入学予定者21名
Ｆ小学校 Ｖ講師 町社会教育委員・元学校教員	「家庭で大切にしてほしいこと」　聴講型（60分） 子どもの発達段階の特徴、および親が子どもに接する「コツ」を学ぶ。また、小学校入学までに、家庭でどのような関わりを具体的にするべきか学ぶ。	９名 入学予定者10名

Ⅵ．調査方法及び分析方法

調査方法は、参加者に対するアンケート調査と生涯学習課職員による参与観察を行った。アンケートは、講座終了後に記入を依頼して、その場で回収した。161人に配布し、156人（男性：２、女性：153、性別未回答：１）から回答を得ることができた（回答率96.9％）。参与観察は、時系列に参加者の様子や学習環境など気づいた点をノートに記入した。

分析には、①参加者のアンケート結果、②生涯学習課職員の参与観察結果、③小学校との打ち合わせ内容、④講師の打ち合わせ内容を利用する。また、「小学校入学半年前という時期をふまえ、保護者が行うべきしつけや関わりについて学ぶことができていたか」、「講座形態は適切であったか」、「講座内容を今後、充実させるにはどうすればよいか」という３つの視点で考察を行った。

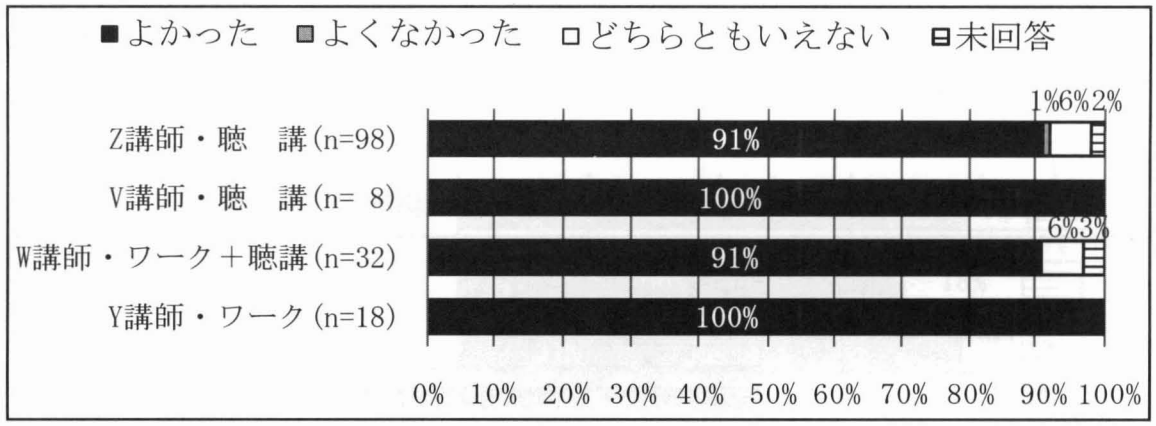
Ⅶ．調査結果１：参加者アンケート

１．講座内容の評価

参加者に、講座内容の評価について質問したところ、すべての講師に対して「よかった」という回答が90％を超えた。

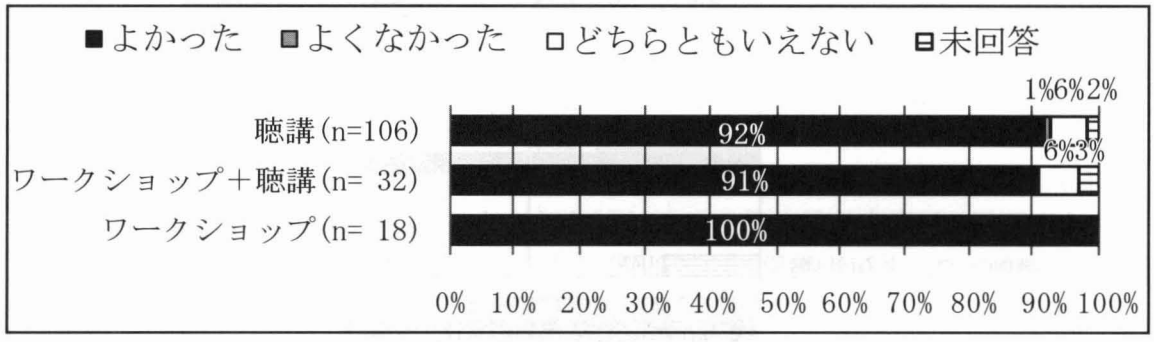
質問：本日の講座の内容について、該当するものにおひとつ○を付けてください。

グラフ１



また、講座形態別にみると評価の差は、ほとんど無いと考えられる。

グラフ２

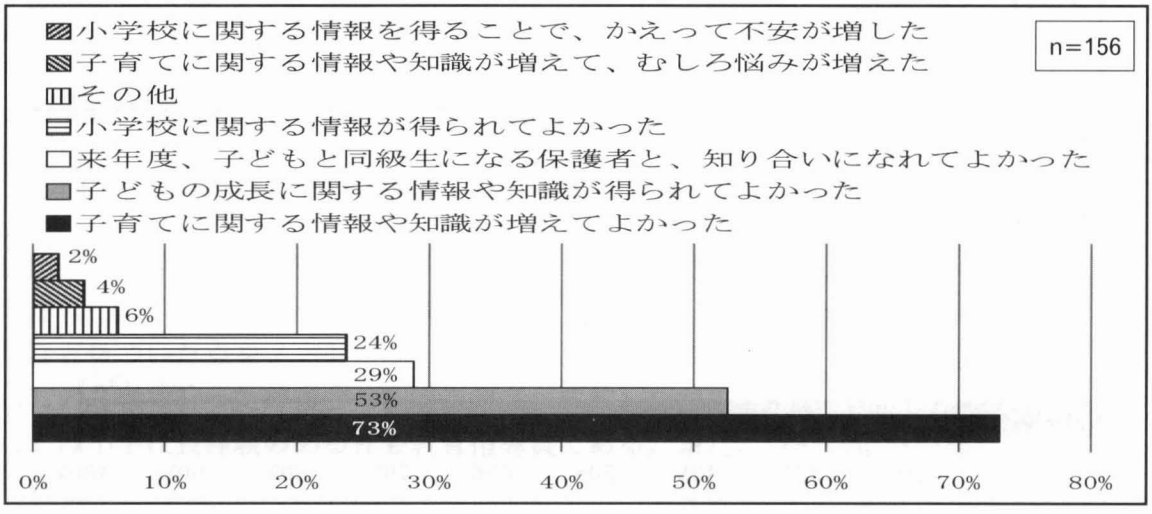


2.「親の学習」を受講した感想

この質問項目は、単なる感想ではなく、講座を通じて学習が深まったかを確認するためのものである。質問に対して、「子育てに関する情報や知識が増えてよかった（１位)」(73.1%)、「子どもの成長に関する情報や知識が得られてよかった（２位)」(52.5%)、「来年度、子どもと同級生になる保護者と、知り合いになれてよかった（３位)」(28.8%)、という結果になった。

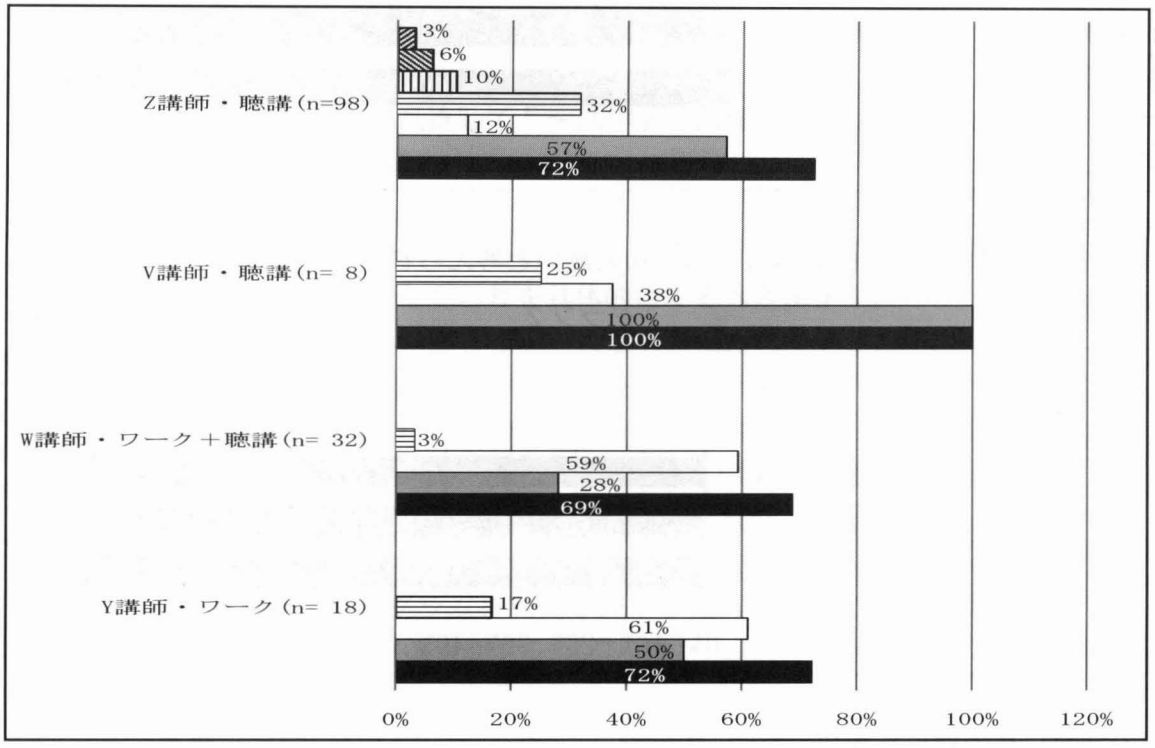
質問：本日の講座を受けて、お感じになったこと全てに○を付けてください。

グラフ３（各回答／アンケートに回答した参加者数）



また、講師別に再集計すると、以下のとおりである。（凡例はグラフ３参照）聴講型のＶ・Ｚ講師は、「子育てに関する情報や知識が増えてよかった」、「子どもの成長に関する情報や知識が得られてよかった」という回答が多く、逆に「来年度、子どもと同級生になる保護者と、知り合いになれてよかった」という回答は少なかった。ワークショップを取り入れたＷ・Ｙ講師は、「子育てに関する情報や知識が増えてよかった」、「来年度、子どもと同級生になる保護者と、知り合いになれてよかった」という回答が多かった。

グラフ４（各回答／アンケートに回答した講師別の参加者数）

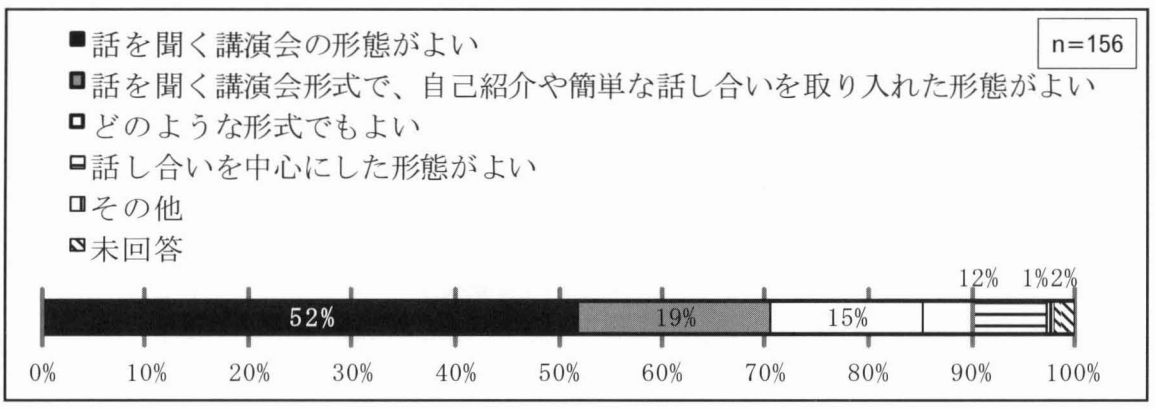


３．参加者が希望する学習形態

昨年度の調査では、参加者の希望する学習形態が把握できなかったので、今回質問項目として追加した。結果は「話を聞く講演会の形態がよい」（51.9％）が最も多く、逆に「話し合いを中心にした形態がよい」は12.4％で、ワークショップを希望する参加者は少なかった。

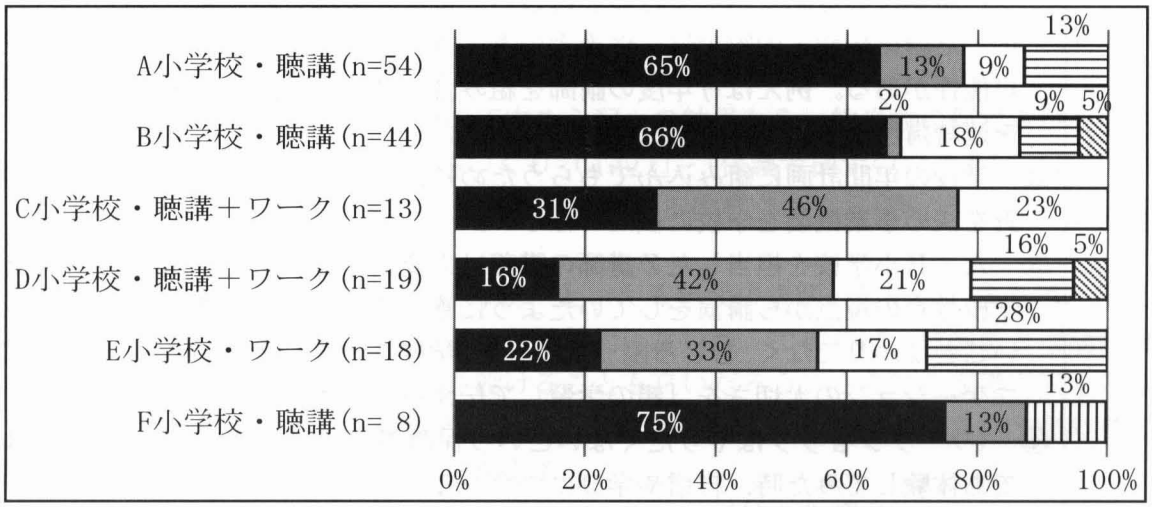
質問：今後、「親の学習」はどのような形態で実施したほうが良いと思うか、該当するものにおひとつ○を付けてください。

グラフ５



さらに、小学校別に集計結果を出してみると、以下のとおりである。(凡例はグラフ５参照) 全体的に、実際に受講した学習形式を選択している傾向がある。これは、学習後のアンケートだけに、何らかの影響を受けていると考えるのが妥当だろう。また、ワークショップ形式で実際に学習したＥ小学校は、「話し合いを中心にした形態がよい」（27.8%）が６校中最も高い割合になっている。

グラフ６

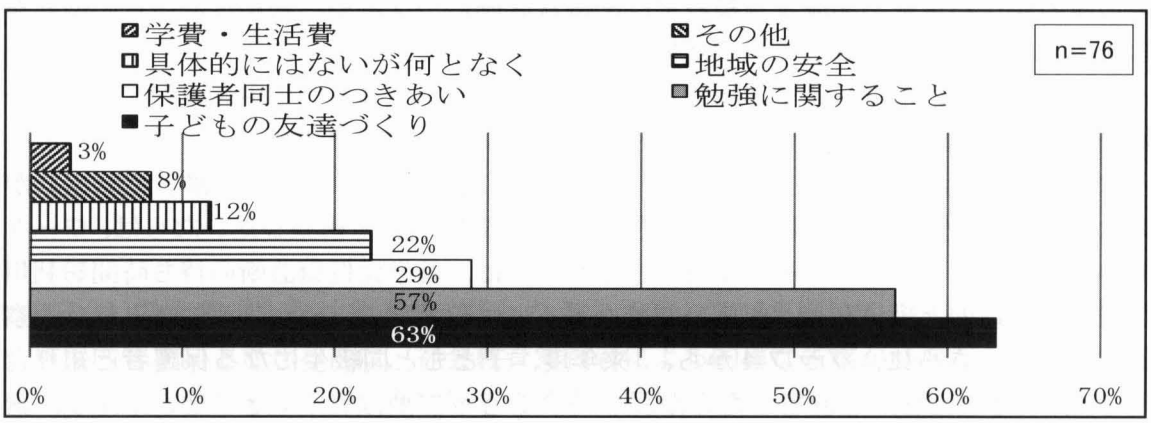


４．小学校入学後の不安や心配

小学校入学後の不安や心配については、「ある」が76人（48.7%）、「ない」が80人（51.3%）と約半数の保護者が不安や心配を感じていることがわかった。この具体的な内容は、以下のとおりで、「子どもの友達づくり」(63.2%)、「勉強に関すること」(56.6%)、「保護者同士のつきあい」(28.9%) が上位にあがった。

質問：先ほどの質問で「ある」と答えた方に伺います。どのようなことが不安や心配か該当するもの全てに○を付けてください。

グラフ７（各回答／「ある」と回答した人数）



Ⅷ. 調査結果２：参与観察に基づく成果と課題

講座の運営については、生涯学習課職員が司会・進行を行った。同時に、時系列に参加者の様子や学習環境など気づいた点をノートに記入した。以下の【表３】は、すべての講座終了後に筆者、職員K、職員Ｌの３者で行った反省会の内容を筆者が要約したものである。職員Ｋは採用２年目の若手職員、職員Ｌは小学校長経験のある社会教育指導員である。また、今回は紙面の都合で、考察に関係する箇所のみ提示する。

表３　参与観察に基づく成果と課題（抜粋）

職員名	気付いた内容
職　員K	①　保護者が連れてきた就学児健康診断を受けない小さい子どもが騒ぐため、学習に集中できない状況が見受けられた。託児ができる体制づくりが必要だ。
職　員L	①　小学校の立場から考えると、講座形態（聴講、聴講＋ワークショップ、ワークショップ）が学校の意向で選択できるのは良い。また、参加者の立場から考えると、定型化した講座形態・内容では、保護者の考え方を狭めてしまい、方向付けしてしまう可能性がある。例えば今年度の講師を組み合わせて、様々な形態・内容の学習機会を連続講座として提供すると理想的である。 ②　学校の年間計画に組み込んでもらうために、平成24年１月ごろには、次年度の方針を決め事業概要を学校に伝えてほしい。 ③　Ａ・Ｂ小学校を担当したＺ講師の講義は大変良かったが、教員経験があるためか、学校教育の視点から講演をしていたように感じる。学校と保護者のかかわりは、良いことばかりでなく、むしろ困った時こそ、学校に伝える必要がある。両者のコミュニケーションの大切さを「親の学習」で伝えることが大切だ。 ④　（ワークショップはやりたくないという保護者の声に対して）気の進まないことでも体験してみた時、自信や学びにつながるという面もある。

Ⅸ. 考　察

１．「小学校入学半年前という時期をふまえ、保護者が行うべきしつけや関わりについて学ぶことができたか」について

参加者アンケート「１．講座内容の評価」で、講座内容について90％以上が「よかった」と回答していること、参加者アンケート『２．「親の学習」を受講した感想』で、「子育てや子どもの成長に関する情報や知識が増えた」という主旨の回答の合計が66％だったことから、学習効果があったと考えられる。一方で、「保護者が行うべきしつけや関わり」がどのようなものか、講師と生涯学習課で共有できていない面があった。明確な目標設定は的確な評価につながる。来年度は、この内容を具体的に共有したうえで、講座を企画していきたい。

２．「講座形態は適切であったか」について

それぞれの講座形態については、参加者アンケート『２．「親の学習」を受講した感想』から、知識を学ぶならば、聴講型が向いており、知識だけでなく、人間関係も構築したいならば、ワークショップ型が向いているという特徴が再確認できた。なぜならば、就学児健康診断の待ち時間を利用しているため講義が60分以内と短いため、幅広い知識を得るには聴講型のほうが効率的だと参与観察をして感じたからである。さらに、グラフ４から、「来年度、子どもと同級生になる保護者と知り合いになれて良かった」（複数回答）と回答したのが、ワークショップ型は61.1％だったのに対し、講義型は12.2％と37.5％だったからである。

さらに、参加者アンケート「３．参加者が希望する学習形態」からは、ワークショップ型は避けられる傾向があった。しかし、実際に学習したＥ小学校だけはワークショップを今後も実施したほうが良いという回答が６校中最も多かった。本町は６校中４校が単級であり、保護者同士の人間関係のつまずきは、小学校卒業まで影響を与えるので、入学前の保護者同士の関係構築は意義がある。次年度以降、小学校と講座形態を協議する際には、本結果をふまえて小学校に提案していきたい。

また、小学校と連携して講座を開催することは、幅広く参加者を集める仕組みを持たない社会教育

側にとって大きなメリットがある。例えば、本町でかつて行われていた独自開催の場合は、「公募＋ＰＴＡに対する動員」に頼らざるを得ず、必然的に参加者は、「意識が高い人」や「ＰＴＡの役員」という偏った層が、指定された日時に参加することになる。一方で、就学児健康診断の機会を利用した場合、小学校入学を控えるほぼ全員の保護者が参加し、待ち時間を活用できる。そのような視点に立てば、社会教育側が主体性を持ちつつも、学校のニーズに応じた内容や講座形態を提供することは、両者の連携を促進して、結果的に良好な学習環境を確保できると考えられる。

3．「講義内容を今後、充実させるにはどうすればよいか」について

アンケート結果の「４．小学校入学後の不安や心配」の結果から、約半数の保護者が心配や不安を感じていた。具体的には、「子どもの友達づくり（１位)」、「保護者同士のつきあい（３位)」が上位にあげられていた。これらは、いずれも人間関係に関する内容であり、「親の学習」を通して支援していくことが求められる。

子どもの友達づくりに関しては、「先輩母親」といえる年代の講師の体験談、または、子どもの発達段階を理解している講師の理論的な助言が効果的ではないか。できれば、体験談と理論の両面から学ぶことが望ましく、複数回の学習機会を設けることも良いだろう。さらに、保護者同士のつきあいに関しても、「先輩母親」の体験談は説得力があると考えられる。このように講座内容の充実や複数回の実施には、講師層の充実をはかる必要がある。

また、調査結果２の学校長の経験がある職員Ｌが語った「学校と保護者のかかわりは、良いことばかりでなく、むしろ困った時こそ、学校に伝える必要がある。」とあるように、保護者は、難しい問題ほど学校には相談がしにくい面があるのではないか。学校と保護者の意識のずれを解消するには、お互いがコミュニケーションをとる必要がある。学校に遠慮しないで相談しても良いことを学校と家庭の当事者ではない「親の学習」の講師から学ぶことは、効果があるのではないか。そして、このことは社会教育側だからこそできる役割と考えられる。

4．平成24年度の方針案

上記の分析をもとに、平成24年度は以下の点に留意したプログラムを開発する予定である。

① ３つの学習形態（聴講、聴講＋ワークショップ、ワークショップ）を継続して提供する
② 講師の情報をさらに収集し、派遣できる講師層を厚くする
③ 複数回の開催を実現するために、小学校に対する情報提供や調整を年内より行う
④ 小学校入学時における保護者の不安に対応するプログラムを検討する
⑤ 学習中の託児の方法を検討する

X．おわりに

「親の学習」は社会教育と学校教育が連携しながら、親の学びを提供する本町の重要な施策の１つである。施策内容を向上させるには、社会教育実践者による的確な省察が必要だが、これまで十分に行われてこなかった面がある。本稿を執筆することは結果的に、自らの実践を「ふりかえり、書いて、まとめる」という行為になったが、このことで本事業の成果と課題をより明確に意識することができたと感じている。このようなプロセスは、労力を要するがより良い事業を実施するには欠かせない省察となるので、今後も継続していきたい。

引用文献・注

(1) 日高幸男『現代家庭教育概論』同文書院，1973，p2
(2) (1)と同じ

(3) 山本恒夫「学校と家庭」，吉本二郎『学校をとりまく勢力』，1988，第1法規出版株式会社，p259-260
(4) 遠藤克弥「家庭教育と社会教育」，遠藤克弥編著『地域教育論』，2011，川島書店，p101
(5) 生涯学習審議会報告「家庭の教育力充実のための社会教育行政の体制整備について」，2000
(6) 中央教育審議会答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～」，2008
(7) 国立女性教育会館「家庭教育に関する国際比較調査」2005，p230-231
(8) (6)と同じ
(9) 埼玉県『「親の学習」プログラム集』，2007，p3